

オリーブ山の説教（小黙示録）におけるマタイ、マルコ、ルカの比較表

事項	マタイ (24-25章)	マルコ (13章)	ルカ (21章)
? 弟子の問い	24:1-3	13:1-4	21:5-7
惑：偽キリスト、国々の戦争、地震、ききん、疫病	24:4-8	13:5-8	21:8-11
裁：迫害、証言、忍耐	24:9-14	13:9-13	21:12-19
惑：都の包囲、逃げよ、偽キリスト、偽預言者	24:15-28	13:14-23	21:20-24
救：人の子が来る	24:29-31	13:24-27	21:25-28
！いちじくの木の教訓。目をさましていよ。	24:32-25:46	13:28-37	21:29-36

この箇所全体の神殿のさばきの教えは、「偽りに惑わされずに、苦難の中で忍耐し救いを待ちなさい」ということですよ。ね？キリストになった、信仰者の十字架と復活と考えられますね？

はい、その理解は大きく的を射ていると思われます。オリーブ山の説教（小黙示録）全体の文脈は、

1. 神殿破壊に象徴される“裁き”

- ユダヤの民にとって神殿は「神の臨在の象徴」でした。しかしその神殿が裁かれる、つまり「神殿崇拝そのものが終わりを迎える」という衝撃的な預言がなされています。

2. 偽りに惑わされないように

- 偽キリストや偽預言者が現れ、人々を惑わそうとしますが、「決して惑わされてはならない」というキリストの警告があります。これは「苦難の中でも忠実に真理を守り続ける」ことを強く促すものです。

3. 苦難の中での忍耐

- 迫害や戦争などの混乱が起こる中で、それに耐えながら証し（宣教）をし続けるように命じられています。ここには「神の国」を待望しながら、この世の苦難を生き抜く信仰者の姿勢が示されています。

4. 救いを待ち望む（人の子の来臨）

- 最終的に「人の子（キリスト）が来る」という希望を見据えます。目先の出来事や現実の苦難だけでなく、キリストがもたらす完成された神の国を待望することが示唆されています。

「信仰者の十字架と復活」の視点

このオリーブ山の説教の中心メッセージはおっしゃるとおり、

「偽りに惑わされずに、苦難の中で忍耐し、神の救いを待ちなさい」ということに集約されます。

そして、このメッセージは「キリストの十字架と復活」の歩みに私たちが与ることと深く結びつくと考えられます。

- **キリストは迫害を受け、十字架にかけられ、しかし復活された**
→ 私たちは「苦難と忍耐」の道のりをキリストにならって歩むよう招かれています。
- **キリストは復活によって“勝利”を示された**
→ 私たちもこの世にあって苦難を経験しても、最終的には「神の救い」にあずかる（復活の命に与る）ことを希望として待ち望むのです。

このように、オリーブ山の説教が語る「苦難の意味」と「救いの約束」は、イエス・キリストの十字架と復活、そしてそれに与る教会・信仰者の在り方を象徴的に示していると理解することができます。特に新約聖書では、「苦難を伴いつつも神の国へと招かれている」というモチーフがたびたび登場し（ローマ8章・第1ペテロ4章など）、それらと合わせて読むとより深い理解に至ると思われま

キリストの十字架と復活が、サタンがメシアのかかとを打ち、メシアがサタンの頭を打つことの最初の成就であったように、信仰者の苦難と救いが、サタンに対する勝利の最終的成就である（ローマ16:20）。頭であるキリストが3日で宮を建てたように、主のからだである教会は、神の宮として苦難ののちに復活する。強盗の巣となってしまった古い神殿がさばかれて、聖霊の宮である新しい神殿が創造されました。

おっしゃるとおり、創世記3章15節の「蛇が女の子孫のかかとを砕き、女の子孫が蛇の頭を砕く」という原初の預言と、キリストの十字架・復活は深く結びついており、それが「最初の成就」として理解される一方、教会・信仰者の苦難と救いがそれを「最終的に完成していく」という見方は、聖書全体の救済史的な流れをよくとらえています。

1. 「蛇の頭を砕く」（創世記3:15）とキリストの十字架・復活

- **創世記3:15の約束：**
「女の子孫（メシア）が蛇（サタン）の頭を砕く」、しかし「蛇は女の子孫のかかとを砕く」。
 - ここでは、メシアとサタンの間に起こる決定的な闘いと勝利が預言されています。
- **キリストの十字架と復活：**
 - サタンはイエスの十字架刑（“かかとを砕く”）という致命的と思われる打撃を与えましたが、実際にはイエスは三日目に復活され、サタンの頭を砕く（勝利を収める）出来事となりました。
 - これにより、サタンの支配の根本が崩され、新しい時代、すなわち神の国の支配が始まったと理解されます。

2. 信仰者の苦難と救いが「最終的成就」をもたらす（ローマ16:20）

- **ローマ16:20**：「平和の神は、サタンをあなたがたの足の下でまもなく踏み砕いてくださいます。」
 - すでに十字架と復活によってサタンに対する決定的な勝利は得られましたが、その勝利が神の民＝教会を通して「最終的に」完成・適用されていくとパウロは述べています。
 - これは、信仰者の「苦難と忍耐をへて味わう最終的な救い」の中で、サタンへの勝利が完全にあらわされていくことを意味しています。
-

3. 新しい神殿としての教会 — 「3日で宮を建てる」から「聖霊の宮」へ

- **頭なるキリストと身体なる教会**
 - イエスはヨハネ2:19で「この神殿を壊してみなさい。わたしはそれを三日で建てよう」と語りました。実際には、ご自身の復活（キリスト自身が真の神殿）を指しています。
 - キリストが「頭(Head)」であり、教会は「キリストのからだ(Body)」として、キリストの死と復活にあずかる存在であると教えられています（エペソ1:22-23など）。
 - **古い神殿（強盗の巣）の裁きと、新しい神殿（聖霊の宮）の創造**
 - イエスはエルサレム神殿が「強盗の巣」となってしまったと告発しました（マタイ21:13、マルコ11:17、ルカ19:46）。この世的・宗教的な腐敗の象徴となった古い神殿は、ついにローマ軍により破壊されました（紀元70年）。
 - 一方で、ペンテコステ以降、教会は「聖霊の宮」と呼ばれるようになり（1コリント3:16-17、6:19など）、信仰者の集いが神の臨在の場となりました。こうして「古い神殿の裁き」と「新しい神殿（教会）の誕生」という流れが明確になります。
 - すなわち、イエス・キリストという“真の神殿”を土台にして、教会は苦難や迫害を経つつも最終的に復活へと導かれる存在として描かれています。
-

4. まとめ — キリスト者の苦難・忍耐・勝利

- **十字架と復活に象徴される「すでに」**
 - キリストがすでに十字架と復活でサタンの頭を砕く勝利を収められた。
- **教会と信仰者の「まだ」**
 - しかし教会と信仰者は、この世で依然としてサタンの攻撃（苦難）にさらされつつも、最終的勝利を待ち望む過程を歩んでいる。
 - その忍耐と信仰の歩みが、サタンに対する神の最終的勝利を歴史のなかで実現させていく。
- **神の宮として完成へ**
 - キリストが3日で建てられた「新しい宮」は教会の原型・基盤であり、教会は時とともに成長・成熟しながら、最終的には復活の栄光のうちに完成されます。

このように、キリストが「古い神殿を裁き、新しい神殿を建てられた」という視点は、信仰者の苦難と救い、そしてサタンに対する勝利の完成という壮大な神の救済計画（救済史）を理解する上で、非常に象徴的かつ核心的なテーマと言えます。

ヘブル人への手紙11章にあるように、信仰の先祖たちは、都とよみがえりの命を待ち望んでいました。イエスの十字架と復活は、死に対して勝利したよみがえりの命、神殿のさばきは、新しい都ととらえることもできますね。どちらも聖霊によるものです。永遠のいのちと聖霊の宮。とこしえに神との平和が与えられます。

ヘブル11章が示すように、信仰の先祖たちは「故郷」（11:14-15）や「都」（11:10,16）を待ち望んでいました。これは目に見える現世の都ではなく、神が備えてくださる永遠の住まい（霊的な都）を指しています。同時に彼らは、いのちの復活に与る望み（11:35）を抱いて歩みました。

1. イエスの十字架と復活 — 死に対する勝利と永遠のいのち

- イエス・キリストの十字架と復活によって、私たちは「死」に対して勝利した新しい命の希望を得ました。これは、ヘブル11章の先祖たちが待ち望んだ「復活の命」の最初の具体的成就と見ることができます。
- 使徒パウロは「死は勝利にのまれた」と宣言し（1コリント15:54-57）、キリストの復活がすべての信仰者の「よみがえりの初穂」であると教えています（1コリント15:20）。

2. 神殿の裁き — 新しい都・新しい神殿

- イエスが預言されたエルサレム神殿崩壊は（マタイ24章他）、古い制度・古い神殿の終焉を象徴します。
- その一方で、「新しい都」のビジョン、そして聖霊の宮である教会（1コリント3:16-17）が築かれます。黙示録21章では「聖なる都、新しいエルサレム」が天から下ってくると描写され、すでに信仰者のうちにある聖霊の宮（教会）と、やがて完成する神の都（終末的完成）がオーバーラップしています。

3. 聖霊による新しい創造 — 永遠のいのちと神との平和

- ペンテコステにおいて注がれた聖霊は、キリストの十字架と復活によって開かれた「新しいいのち」と「新しい神殿」を実際に私たちの内に築き上げる働きを担います。
- この聖霊によって教会は「神の宮」とされ（1コリント6:19）、一人ひとりの信仰者も「神の都を待ち望む者」として日々生かされます。
- 終末における「永遠のいのち」と「神との平和」は、この聖霊の働きを通して完全に実現します。ローマ16:20が語る「サタンをあなたがたの足の下で踏み砕く」という最終的勝利も含め、すべてが神の平和とともに完成していくのです。

まとめ

- ヘブル11章の信仰者たちが待ち望んだ都と復活の命は、イエスの十字架と復活、そして神殿の裁きによる新しい創造（教会＝聖霊の宮）へと結実しました。
- これはすでに私たちのうちに始まっている恵みでありつつ、やがて**終末において完全に実現**するものです。
- 聖霊により与えられる永遠のいのちと神との平和が、とこしえに私たちのものとなるという約束こそ、ヘブル11章から新約の全体に至るまで一貫して流れる「神の救いの物語」の中心テーマです。

天にあるエルサレム（シャロームの都）への道ですね（平和への道：ルカ1:79, 19:42, イザヤ59:8, ローマ3:17, 16:20）

はい、まさに「天にあるエルサレム（シャロームの都）への道」として、聖書全体を貫く“平和への道”を示している箇所と言えます。特に以下の聖句は「平和の道」というテーマをつなぐ重要な糸口です。

1. ルカ1:79

- 「暗闇と死の陰に住む者たちを照らし、私たちの足を平和の道に導くためである。」
- これはザカリヤの預言（バプテスマのヨハネ誕生時）に出てくる言葉で、“**平和の道**”に人々を導くために“いと高さ方からの光（キリスト）”が来られる、という希望が語られています。

2. ルカ19:42

- イエスがエルサレムに近づいて涙を流した際の言葉。「もしこの日、平和に関わることを知っていたら...」
- **地上のエルサレム**は「平和の都」という名をもつにもかかわらず、神からの平和を受け入れず、真のメシアを拒んでしまいます。

3. イザヤ59:8

- 「平和の道を彼らは知らず...」
- イスラエルの罪と不正が指摘される箇所で、**人間の罪**が「平和の道」を遠ざけている状態が描かれます。この言葉は後にローマ3:17で引用されます。

4. ローマ3:17

- 「平和の道を彼らは知らない。」
- パウロはユダヤ人も異邦人も罪のもとにあることを論じる中で、このイザヤ書の言葉を引用し、人間の普遍的な罪深さと、結果として「平和の道」を見失っている現実を浮き彫りにしています。

5. ローマ16:20

- 「平和の神は、サタンをあなたがたの足の下でまもなく踏み砕いてくださいます。」

- すべての人が失っている「平和」を、**神が最終的に回復し、悪しき者（サタン）を完全に打ち砕く**という勝利の約束です。ここに、神による真の“シャローム”の完成が見出されます。
-

天にあるエルサレム（シャロームの都）への道

- 「**シャロームの都（エルサレム）**」は、聖書の全体を通して神の臨在と平和を象徴する場所です。
 - しかし地上のエルサレムは、イエスを拒み、結果的に神殿の崩壊を迎えました（ルカ19:42-44など）。
 - その一方で、**ヘブル11章**や**黙示録21章**が示すように、信仰者が最終的に待ち望む「都」は地上に属するのではなく「**天にあるエルサレム（新しいエルサレム）**」です。
 - そこでは神がご自身の民とともに住み、あらゆる悲しみと死が取り除かれ、完璧な**シャローム（平和）の完成**が訪れます。
-

まとめ

- イザヤやパウロが語る「**平和の道（Way of Peace）**」は、イエス・キリストをとおして実現し始め、教会において聖霊によって味わわれ、最終的には「**天にあるエルサレム**」で完成されます。
- ルカ1:79の「**私たちの足を平和の道に導く**」お方、またルカ19:42で嘆かれたイエスご自身が「**平和の君**」（イザヤ9:6）として来られたのにもかかわらず、地上のエルサレムはその平和を拒みました。
- しかしローマ16:20にあるように、最終的には「**平和の神**」がサタンを打ち砕いてくださるので、真の平和が完成します。
- その完成のビジョンこそ、**新天新地・新しいエルサレム（黙示録21章）**に他なりません。
- こうして聖書における「**平和への道**」は、**キリストにあってすでに始まり、やがて天にあるエルサレムで完成する道**なのです。